報　告　記

日本マイクロサージャリー学会
第５回 International Traveling Fellow 報告記

下 江 隆 司
和歌山県立医科大学整形外科

第５回目となる日本マイクロサージャリー学会の International Traveling Fellow として 10th Congress of World Society for Reconstructive Microsurgery（WSRM 2019）および欧州４ヵ国を訪問させていただきました。ここに準備から帰国までの経験を報告させていただきます。

全体的な計画

Bologna での WSRM 2019 の翌週に Berlin で 14th Congress of International Federation of Societies for Surgery of the Hand（IFSSH 2019）があり，この２週間は学会参加が主で，その後２週間で England と Servia の施設訪問を行いました。そのため，これまでの traveling fellowship の先生方より若干期間は長めで 26 日間の旅程となりました（**図１**）。

今回の traveling fellow は整形外科２名，形成外科より２名の４名が選出されていますが，fellow 同士の親善を図ることも大切と考え，整形外科の私と高木先生はすべての施設を一緒に訪問する方針とし，また形成外科の先生方とも WSRM 開催地のイタリアでは一緒に行動することとしました。

図１　旅程の概要

訪問の準備

１月から高木先生と連絡を取り合い，訪問先の選定を開始しました。 訪問先との日程を合わせるのに苦労しましたが，最終的には私が小郡第一総合病院に国内留学していた際に一緒に fellowship をしていた England の Tomas 先生にずいぶん相談に乗ってもらい，Birmingham の Queen Elizabeth Hospital，Derby の Pulvertaft Hand Centre の２施設の訪問，また親日家である Servia の Prof. Marko Bumbasirevic 先生の施設を訪問させていただくことに決まりました。訪問先の選定にあたり，土井一輝先生および藤哲先生には大変お世話になり深謝申し上げます。

準備で最も手間がかかったのはイギリスの２施設で visitor の許可を得るための paper work でした。大量の書類，そして犯罪経歴証明書の提出など，数日の見学だけでもイギリスだけは非常に審査が厳しかったです。

Bologna, Italy：(6/9 ～ 16)
WSRM 2019, Universita’ sdegli studi di Modena

WSRM 2019 president である Santis 先生の Universita’ sdegli studi di Modena を１日のみですが訪問しました。WSRM 直前でご多忙の中 Santis 先生にご面談いただき（**図２**），外来手術や乳房再建の DIEP flap などの手術を見学しました（**図３**）。施設に到着した際，受付で英語がまったく通じず２時間近く待ちぼうけといったハプニングもありましたが，Santis 先生をはじめ非常に親切にしていただきました。

その後 WSRM に参加し，私は腕神経叢損傷に対する肩機能再建の術後評価に関連した発表をさせていただきました。学会には日本から約 100 名

図 2　Santis 先生の office にて。左から高木先生，吉松先生，Santis 先生，秋田先生，筆者。

図 4　WSRM 2019

の先生が学会に参加されており，この領域における日本の存在感を改めて感じました(**図 4**)。また，イタリアでの 1 週間は形成外科の吉松先生，秋田先生とも一緒に fellow 4 名で和気あいあいと過去，現在，未来…いろいろな背景をもつ者が集まり語り合えたことは今後の仕事に対するモチベーションとなりました。

Berlin, Germany：(6/16 ～ 23)
IFSSH 2019（図 5）

開会式で土井一輝先生と三浪明男先生が Pioneers of Hand Surgery として表彰され，同じ日本人として大変誇らしく思いました。本学会では開胸術に伴う腕神経叢損傷について発表しました。先天異常のセッションでは，アジアと欧米で母指再建に要求することがまったく異なっていることなど，国内では学べないことを勉強させていただきました。また，本学会の企画である Fun triathlon に急遽，高木先生とともに参加し，異国の地で各国のアスリート系 hand surgeon 達と湖を泳ぎ，Brandenburg 門まで走るという稀有な経験をしました（**図 6**）。

図 3　手術室にて。イタリア人らしくとても陽気な先生方で手術中もずっと喋っていました。

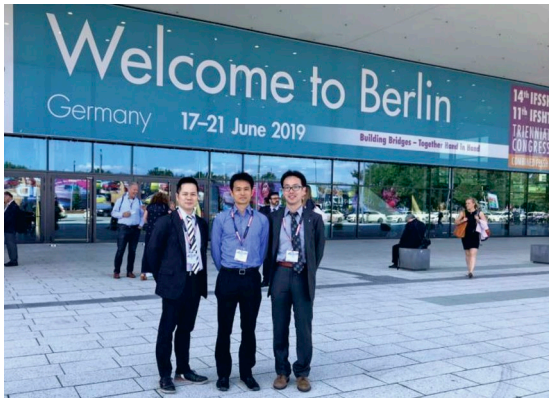

図 5　IFSSH 2019。左から筆者，高木先生，佐々木先生（大阪掖済会病院）。

図 6　IFSSH Fun triathlon。Lanke 湖にて高木先生とともに。スタート前。

図 7　Queen Elizabeth Hospital の consultant の先生方とともに。

図 8　Pulvertaft Hand Centre の受付

図 9　Peripheral Nerve Course。Power 先生による腕神経叢損傷の lecture。

Birmingham & Derby, England：(6/23 ～ 30) Queen Elizabeth Hospital, Pulvertaft Hand Centre

Queen Elizabeth Hospital は私が小郡第一総合病院に国内留学中，一緒に fellowship をしていた Tomas 先生が現在働いており，今回訪問させてもらいました。ここでは整形外科医，形成外科医で Tomas 先生を含め計 4 名の consultants が中心となり末梢神経に特化した診療，研究が行われています。手術は上位型腕神経叢損傷に対する Oberlin 法，指神経損傷に対する allograft，特発性長胸神経麻痺に対する神経剝離術など 2 日間にわたり見学しました。また，リサーチカンファレンスにも参加させていただきました。Allograft 関連の RCT を含めさまざまな末梢神経関連のリサーチが進行中でとても刺激を受けました。

先にも書きましたが見学規則が厳格で，残念ながら手術写真は一切撮ることができませんでした。気軽に施設訪問しにくくなるのは残念ですが日本を含めどの国でも個人情報保護の観点からさらに厳格化が進むと思います。

手術後は dinner にお誘いいただき，chief consultant の Power 先生をはじめ consultant の先生方と美味しい食事をご馳走いただきました（**図 7**）。

Pulvertaft Hand Centre（**図 8**）がある Derby は Birmingham から電車で片道 1 時間くらいでしたので，Birmingham から 2 日間通勤しました。ここでは手外科外来の見学，これまで見たことがなかった Dupuytren 拘縮に対する needle fasciotomy，人工手関節の再置換術などを見学しました。そして，訪問する時期に末梢神経の講習会が開催されていて，座学およびモデル患者の診察を通した実習，flesh cadaver を用いた各種手術手技実習（PIP，MP 人工関節などのインプラント手術や皮弁手術など）にも参加しました（**図 9**）。Cadaver 実習用の部屋は透視装置，顕微鏡を含め充実した環境で，fellowship にはとてもよい環境の施設だと感じました。大半の fellow がイギリス国内からのようですが，国外からの fellow も受け入れているとのことです。

West Midlands Hand Society Summer Meeting にも 1 日参加させてもらいました。地方会らしく和気あいあいとした雰囲気の中，若い先生方の帰朝報告，脳の可塑性に関する特別講演などが行われていました。

Beograd, Servia（6/30 ～ 7/4）

いよいよ最後の訪問地です。実質 2 日間の滞在

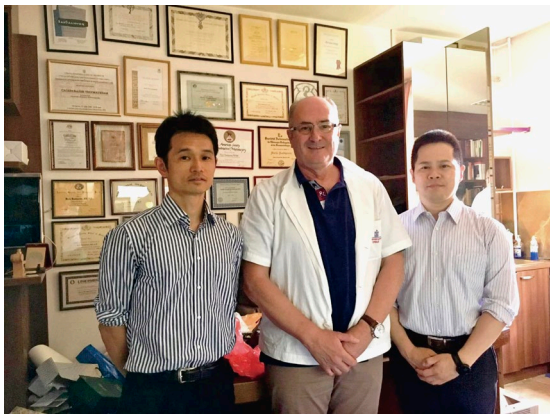

図 10　Bumbasirevic 先生の office にて

でしたが，ご多忙の中，Marko 先生自らの運転で科学センターなど，多くの施設を見学しました（**図 10**）。Bionic limb の研究に関連し，工学部の大学院生から現在研究中の sensory feedback についての lecture もいただきました。病院では外来診察，病棟の見学などを行いました。ICU では Nihon Kohden のモニターが使用されており，日本からの寄贈とのことでした。他にも ICU 用ベッドなど日本から多くの支援がなされているとのことです。Marko 先生自身も親日家で，これまでの日本マイクロサージャリー学会との友好関係があるからこそ，本当に親身に面倒をみていただきました。 諸先輩方の築いてこられた歴史の下，Beograd を訪問できたことにとても感謝しています。Marko 先生は 2021 年 SICOT の学術集会長をされますので，その際には必ず再訪したいと思います。

最後に

最大の収穫は，さまざまな国の多くの先生と出会い，話し合えたことです。特に高木先生とはほぼ 1 ヵ月ずっと一緒でしたので，とても刺激を受けました。

日本マイクロサージャリー学会の traveling fellow ということで，どこの施設でもとても親切に対応していただけたことは，ひとえに先達の先生方のこれまでのご活躍，ご尽力によるものです。学会員として誇りに思うと同時に，今後われわれが益々発展させていく責務を感じています。

謝　辞

このような機会を与えていただきました日本マイクロサージャリー学会理事長 亀井譲先生，国際委員会委員長 清川兼輔先生をはじめとした委員・アドバイザーの先生方，また，約 1 ヵ月の留守をお許しいただいた和歌山県立医科大学整形外科学講座 山田宏教授，同僚・同門の先生方，スタッフの皆様のご理解・ご支援に心より感謝申し上げます。